
病院の怪談

暗黒女帝・猫又垂氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病院の怪談

【コード】

N0871J

【作者名】

暗黒女帝・猫又垂氷

【あらすじ】

病院で仕事中のナースたちに起こった、ちょっとだけ不思議な出来事。

それは、とある蒸し暑い夜の出来事。 。
三階建てのその建物は、ちょうど中央部分に採光用と思われる吹き抜けが存在していた。

時間はちょうど21時半を過ぎたばかり…。蒸し暑さに我慢できないので、ちょうどその吹き抜けに面した窓を開け放っていた。いた場所はちょうど三階部分。女3人が、それぞれに仕事をしていたその時。

窓の外から、若い女性のひそひそと話す声と、時々交る笑い声が聞こえてきた。それも、かなりのボリュウムで…。三階にいた女三人は

「ずいぶん、賑やかだね」。今日に限ってさ」。
と、顔を見合わせた。

ちょうど真下の二階部分にも、女性が詰めていた。しかもこの日は役職を持つ人間も一緒という。はっきり言って、この状況下で「馬鹿話」に花が咲くとは思えなかったのだが…。聞こえてくる笑い声は、まさに楽しそうであった。

女性数人のかشましい会話や笑い声は22時を回っても止まる事がなかった。

「これさ」。もう少し続くようなら苦情いった方がいいんじゃない?？」

とは、言うものの。相手は役職付きを含む集団。もう少し様子を見ようという事になり、それぞれがその話声に眉を寄せながらも静かに仕事をしていた。

23時直前、その声は突然聞こえなくなった…。

流石に仕事に散会したか。

三階に詰めていたスタッフは誰もがそう感じた。

仕事を終えて、ちょうど帰りの事。二階のスタッフと顔を合わせる事になったのだが、当然話題はあの『ばか騒ぎ』とも言えるほどの笑い声の話になった。その時

「えっ、賑やかなのは三階のスタッフだと思ってましたよ」と、年の若いスタッフが答えた。

「ずいぶんと、今日は楽しそうに仕事してるって思っていました」そう切り返された三階詰めスタッフは顔を見合わせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0871j/>

病院の怪談

2010年10月15日21時02分発行